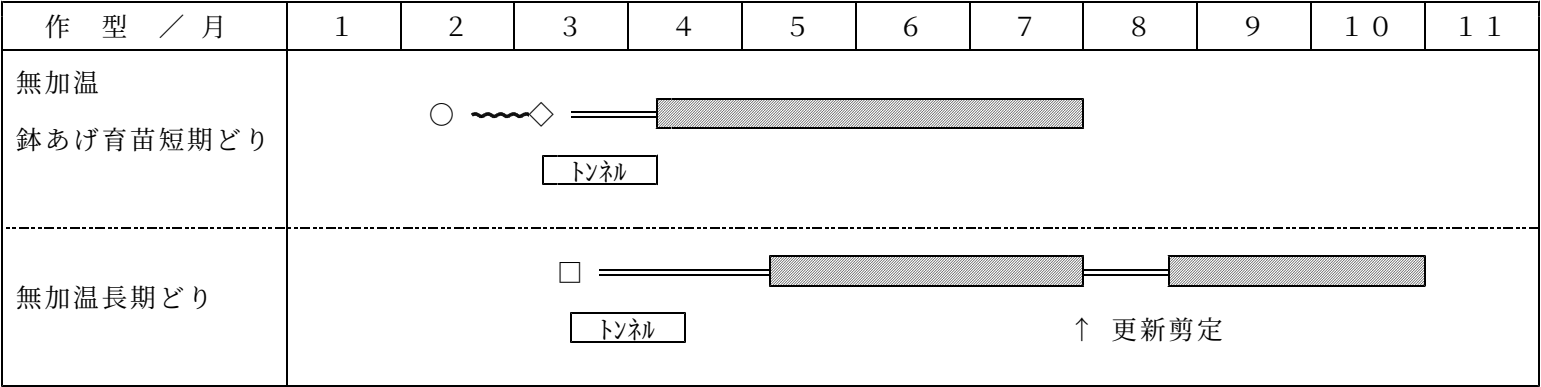


半促成なす



凡例 ○：鉢あげ ~~~~：育苗 ◇：定植 □：購入苗定植 =====：本ば管理 ■：収穫

1．品種例

穂木：千両、千両2号
台木：赤ナス
トルバムビガー(半身萎凋病等発生の場合)

2．目標収量

鉢あげ短期どり： 6,000 kg／1,000㎡
長期どり ：10,000 kg／1,000㎡

3．栽培のポイント

- (1) 適正な基肥投入と温度確保による初期管理
- (2) 整枝、摘葉の徹底

4．技術内容

(1) 育苗（鉢あげ育苗する場合）

① 鉢土準備

鉢土は苗1,000本に対し約1㎡用意する。
鉢あげの2週間前に田土1㎡に対し完熟堆肥300kgをよく混ぜ込み、臭化メチルでくん蒸消毒を1週間行う。
くん蒸後、3～4日間ガス抜きを行い、苦土石灰 1.5 kg、細粒868を1.5 kg加え、よく混合したものを鉢土用土として用いる。

② 育苗床準備

日当たりの良いハウス内に温床を作り、電熱線を㎡あたり80wの割合で配線する。
温床は苗1,000本当たり 40㎡必要で、上記の用土を12 cm径ポリポットに詰めて並べ、トンネルを掛けられるようにしておく。
鉢あげの1～2日前から通電し、鉢を暖めておく。

③ 鉢あげ、育苗管理

2月上旬に、本ば1,000㎡あたり購入苗（7.5cmポット） 1,000鉢を導入し、12cmポリポットに鉢あげする。
温床をトンネルで被覆し、定植まで20～30日育苗する。
育苗中の温度管理の目安は
鉢あげ～順化 日中25～27℃、夜間16～18℃
順化時 日中23～25℃、夜間14～15℃

朝は早目にトンネルを開き、太陽光線を取り込み、夕方は早い目に閉め、夜間の保温に努める。

徒長を防ぐため、葉が混み合う前に温床を広げてずらしを行い、かん水は控えめにする。

本ば定植1週間前からは苗の順化のため夜間の温度を14℃位まで下げ、苗の硬化をはかる。

なお、苗床での病虫害防除は徹底して行い、本ばに持ち込まないように注意する。

(2) 本ば準備

① 基肥施用

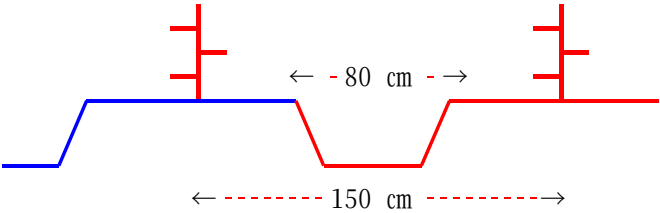
連作ほ場では、作付け前に必ず土壌分析を実施し、結果に応じて基肥施用量を決定する。
前年中に完熟堆肥、鶏ふん、苦土石灰を施用し、全耕しておく。

定植の1週間前に残りの基肥を施用し、整地後かん水チューブを設置し、充分にかん水した後透明マルチをかけ、地温の上昇をはかっておく。

②施肥例（kg／1,000㎡）

肥 料 名	成 分	基 肥	追 肥
完熟堆肥		2,000	
苦土石灰		120	
乾燥鶏ふん		200	
BMようりん	0-20-0	60	
蒸製骨粉	4-22-0	60	
C D U化成	12-12-12	100	
速効性化成肥料	16-10-14	30	
油かす	5-2-1		60×2
N K化成	16-0-20		30×6

③畝立て、栽植密度（1,000株／1,000㎡）



(3) 定植

定植は風のない晴天日を選んで行う。

前日に植穴を掘っておき、ミナミキイロアザミウマ防除のため、県防除基準に基づき殺虫剤（粒剤）を1穴に1～2 g 施用し、トンネルをかけて地温を上げておく。

苗にも前日に充分にかん水しておく。

株間50cm、畝の中央に1条植えにする。深植えにならないように、鉢土を畝表面より高く植え付ける。

植付け後充分にかん水し、仮支柱をして固定する。

1畝ごとに定植が終わればトンネルをかける。

(4) 温度管理

初期生育促進のため、内カーテンおよびトンネルで比較的高温に管理し、日中は25～30℃とし、30℃以上になれば換気する。夜間は16～18℃の確保に努める。

トンネルの除去はハウス内の夜温が12℃以上確保できる時期を目安とし、カーテンも14～15℃程度あれば閉じないでおく。

4月に入ると外気も上昇するので、ハウスサイドの開閉により温度調節する。

6月以降は夜間もハウスサイドを開放する。

(5) 光線管理

同化作用促進のためにも、早朝から積極的に太陽光線を取り込むようにする。

トンネルは早めに関き、カーテンも必要温度が確保できれば開くようにする。曇雨天日でも採光することが大切である。

(6) かん水

果実の発育促進、品質向上のため生育期間中は十分な水分を供給する。かん水量、回数は畝の土壌水分をマルチをめくって確かめながら決定し、急激な乾湿がないようにする。

夏期には水分要求量も多くなり、水分不足は樹勢の低下、つやなし果の発生、ハダニの多発原因となるので注意する。

チューブかん水で不足する場合は、夕方に畝間にかん水を行う。

(7) 整枝・誘引・摘葉

① 主枝の整枝と誘引

主茎と1番花の下から発生する強い側枝2本を主枝とし、3本仕立てにする。

誘引は充分に採光できるように主枝を配置する。

支柱を畝の両肩に2 mおきに立て、針金（16番線）を地上1 mと2 mの高さに2段に張り、3本の主枝を2本と1本に振り分けて誘引する。

主枝は針金に直接しばりつけるか、またはビニールひもで引っ張って誘引する。

主枝の先端が上の針金のところまで伸びれば、摘心して側枝の発生を促す。

② 側枝の整枝

側枝に蕾が1つ現れれば、その上1葉残して摘心し、1ヵ所に複数の花が着いた場合は弱い花を摘み取る。

太く、勢いがある側枝では上段の花も残して摘心する。

側枝の果実を収穫する際は、同時に切り返し剪定を行い、孫枝の発生を促す。

③ 摘葉

黄化した葉や主枝を覆う大きい葉は摘葉し、株の中心部および株元まで光線が当たるようにする。

葉は一度にたくさん取らないようにする。

(8) 追肥

生育期間が長く、栄養生長と生殖生長が同時に行われるので、全期間を通じて肥料を効かせるよう、速効性の化成肥料を主体に、適宜、追肥する。

なお、栄養状態が良い株では花は大きく、花卉の色は濃紫色で、長花柱花である。開花位置は枝の先端から15～20cmで、花の先の葉数は4～5枚である。

栄養状態が悪いと、花は小さくなり、開花数が減少し、短花柱花が多くなる。開花位置は枝の先端に近くなり、花の先の葉数も1～2枚になる。

(9) 着果促進

低温期において確実に着果させるために、ホルモン剤を使用する。

ホルモン剤はトマトトーンを使用する。希釈倍率については、処理時の温度、湿度、樹勢によって変える。

当日または前日に開花した花に、家庭用スプレー等で希釈液を1花あたり0.6ccずつ噴霧する。この時、希釈液が葉や茎、生長点にかからないよう注意する。

また、重複処理を避けるため、希釈液1リットルあたり食紅を1～1.5g溶かしておく。

ホルモン処理濃度（トマトトーン）

月	3	4	5	6
希釈倍率	25～30	40	50	60～70

樹勢の強い場合は、やや濃いめにする。

(10) 花抜き

ホルモン処理後、幼果に花卉が付いていると灰色かび病が発生しやすく、着色不良果が生じやすくなるので、必ず花卉を抜き取る。

花卉はあまりに早く抜くと幼果に傷を付けることもあるので注意。

(11) 更新剪定

生育が進み混み合ってくると、採光、通風が悪く、病害虫の発生や樹勢が衰えてくるので、7月下旬に主枝3本とも、基部の葉を2～3枚残して、強く切り取り、枝の更新を図る。

(12) 主な病害虫防除（県病害虫防除基準を参考にする）

- ① ハダニ：高温乾燥が続くと発生しやすい。こまめに観察し、初期防除に努める。更新剪定時の防除が効果的である。薬剤抵抗性がつきやすいので、グループの異なる薬剤でのローテーション使用に心がける。
- ② 灰色かび病：花卉抜きが不十分だと発生しやすい。
- ③ うどんこ病：高温乾燥期に発生しやすい。過繁茂の株に出やすい。発生初期の薬剤防除が効果的である。
- ④ ミナミアザミウマ：苗からの持ち込みが多いので、定植直前に十分防除しておく。ハウス側面に寒冷紗等を張り、侵入を防ぐ。

(13) 主な生理障害（原因と対策）

① 石ナス果

原因：日照不足、摘葉のしすぎ、養水分不足、ガス害等による同化養分の不足、または低温、樹勢の低下、栄養過多による果実への転流不足。

窒素の多施用、水分過多などで発生が多い。

対策：保温、採光を図り、同化と転流を促進する。

養水分の適正管理により樹勢を調整する。

発生したら、ホルモン処理濃度を高くし、確実に着果させる。

② ガク割れ果（裂果）

原因：高濃度、高温時のホルモン処理。

未熟花への処理や重複処理でも発生する。

窒素肥料の多施用により石灰欠乏症の花にも発生しやすい。

対策：ホルモン剤の適正処理と、水分、肥料の適正な管理による石灰欠乏症の防止。

③ つやなし果（ボケナス）

原因：果実肥大期における水分の転流不足。

土壌水分の不足、根の機能低下による吸水不足。

長雨の後の晴天時等に発生しやすい。

対策：かん水。土壌物理性の向上（保水、排水性向上のための資材投入）。

④ 着色不良果

原因：日照不足、採光不良、ビニールの汚れ等による光線透過率の低下、紫外線カットフィルム等の使用。花抜き作業の不徹底。

対策：整枝、摘葉による採光性の向上。花抜きの徹底。フィルムの洗浄、使用被覆資材の検討

⑤ デコボコ果（ブク果）

原因：高温下や樹勢が弱い時の高濃度ホルモン処理。

対策：ホルモン剤濃度の調整、樹勢回復。

⑥ 奇形果（キンチャク果、双胴果など）

原因：低温時の強い切返し。高濃度ホルモン処理など。

対策：ホルモン剤濃度の調整。

⑦ 日焼け果

原因：果実面の結露や直射日光の影響。

急激な温度上昇による過剰な蒸散による相対的な水分不足。

対策：早朝（日の出頃）換気によって結露の防止、温湿度の急激な変化を小さくする。

また、実が葉の影になるように、十分な灌水によって葉を繁らせる。

（川村 藤夫、近藤 博次）